

emicizumab (genetical recombination) (JAN)

エミシズマブ (遺伝子組換え)抗血液凝固第IXa/X因子ヒト化二重特異性モノクローナル抗体
血液凝固第VIII因子機能代替製剤

634

【基本電子添文】ヘムライブラ皮下注2024年9月改訂

【製品】 規制等：[生物] [処方], [保険通知] 《ヘムライブラ皮下注30・60・90・105・150mg 2018.03.23承認》
ヘムライブラ Hemlibra 皮下注12・30・60・90・105・150mg (中外)

【組成】〔注射液〕：1バイアル中12mg/0.4mL, 30mg/1.0mL, 60mg/0.4mL, 90mg/0.6mL, 105mg/0.7mL, 150mg/1.0mL。pH：5.5～6.5 浸透圧比：(12・30mg) 約1.0, (60・90・105・150mg) 約1.2

本剤は、チャイニーズハムスター卵巣細胞を用いて製造される

【効能・効果】 ①先天性血友病A (先天性血液凝固第VIII因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制 ②後天性血友病A患者における出血傾向の抑制

効能関連注意 先天性血友病A (先天性血液凝固第VIII因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制：本剤は、血液凝固第VIII因子に対するインヒビターの有無によらず有効性が確認されている (臨床成績①a～④参照)

【用法・用量】 エミシズマブ (遺伝子組換え) として ①先天性血友病A (先天性血液凝固第VIII因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制：1回3mg/kg (体重) を1週間の間隔で4回皮下注し、その1週間後 (初回投与から4週間後) の5回目投与から次のいずれかの用法・用量で皮下注 a) 1回1.5mg/kg (体重) を1週間の間隔 b) 1回3mg/kg (体重) を2週間の間隔 c) 1回6mg/kg (体重) を4週間の間隔 ②後天性血友病A患者における出血傾向の抑制：1日目に6mg/kg (体重)、2日目に3mg/kg (体重) を皮下注し、8日目から1回1.5mg/kg (体重) を1週間の間隔で皮下注

用法関連注意 ①効能共通：本剤は、出血傾向の抑制を目的とした定期的な投与のみに使用し、出血時の止血を目的とした投与は行わない ②後天性血友病A患者における出血傾向の抑制：凝固能に関する検査結果及び患者の状態を考慮して、適切な時期に投与を終了する (重要な基本的注意③、臨床成績②参照)

【警告】 ①インヒビター保有先天性血友病A患者を対象とした本剤の臨床試験で、活性型プロトロンビン複合体 (乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体) 製剤との併用において重篤な血栓塞栓症及び血栓性微小血管症の発現が複数例に認められている。本剤投与中及び投与中止後6ヵ月間は、治療上やむを得ない場合を除き、活性型血液凝固第IX因子及び血液凝固第X因子を含む、活性型プロトロンビン複合体 (乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体) 製剤及び乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤の投与を避ける。血栓塞栓症及び血栓性微小血管症のリスクを増大させる可能性がある

(重要な基本的注意①a, 相互作用, 重大な副作用②b参照) ②本剤は血友病治療に十分な知識・経験を持つ医師のもと、緊急時に十分対応できる医療機関で投与開始する (重要な基本的注意①a, 相互作用, 重大な副作用②b参照) ③投与開始に先立ち、患者又はその家族に危険性 (出血時のバイパス止血製剤の投与における危険性を含む) を十分説明し、同意を得た上で投与する

【禁忌】 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【重要な基本的注意】 ①効能共通 a) インヒビター保有先天性血友病A患者を対象とした臨床試験において、本剤投与中の出血時に活性型プロトロンビン複合体 (乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体) 製剤を併用した36例において、血栓塞栓症が2例 (5.6%)、血栓性微小血管症が3例 (8.3%) に認められている。また、乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤を投与することにより血栓塞栓症及び血栓性微小血管症が現れるおそれがあるため、次の事項に注意する。当該事項については、その重要性及び必要性を患者又はその家族にも説明し、理解及び同意を得た上で投与を開始する (警告①②, 相互作用, 重大な副作用②b参照) ⑦本剤開始前日までに、バイパス止血製剤による定期輸注は中止する。また、本剤中止後6ヵ月間は、バイパス止血製剤による定期輸注は行わない ④本剤投与中にバイパス止血製剤を投与する場合は、活性型プロトロンビン複合体 (乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体) 製剤及び乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤の投与は避け、活性型血液凝固第VII因子〔エプタコグアルファ (活性型) (遺伝子組換え)〕製剤を投与する。更に、次の事項にも注意する (1)活性型血液凝固第VII因子〔エプタコグアルファ (活性型) (遺伝子組換え)〕製剤については、在宅自己注射を行う場合がある。投与の必要性の判断方法、用量等を、あらかじめ患者に指導する。また、在宅自己注射を1回実施しても止血できない場合は、医療機関へ連絡するよう指導を行う (2)やむを得ず活性型プロトロンビン複合体 (乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体) 製剤を投与する場合は、必ず血友病に対する十分な治療経験を有する医師のもと、必要な血液凝固系検査等が実施可能で血栓塞栓症及び血栓性微小血管症に対する適切な処置が可能な医療機関で投与する。また、投与後は血液凝固系検査等により患者の凝固系の状態を注意深く確認する。異常が認められた場合には本剤及びバイパス止血製剤の投与を中止し、適切な処置を行う (3)乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤は、本剤と併用された経験が極めて少ないため、前記(2)と同じ対応をとる ⑤本剤中止後6ヵ月間は、前記④と同じ対応を行う ⑥本剤は活性化部分トロンボプラスチン時間

(APTT) 又はAPTTの測定原理に基づく検査値に影響を及ぼすため、投与した患者の検査値には従来の判断基準が適用できないことに注意する ⑧在宅自己注射における注意 ⑦在宅自己注射の適用については、医師がその妥当性を慎重に検討し、十分な教育訓練を実施した後、本剤による危険性と対処法について患者又はその家族が理解し、確実に投与できることを確認した上で、医師の管理指導のもとで実施する ④患者又はその家族に対し、在宅自己注射後に何らかの異常が認められた場合は、速やかに医療機関へ連絡するよう指導を行う ⑤在宅自己注射の継続が困難な状況となる可能性がある場合には、直ちに

在宅自己注射を中止させ、医師の管理のもとで慎重に観察するなど適切な処置を行う ②先天性血友病A（先天性血液凝固第VIII因子欠乏）患者における出血傾向の抑制：本剤開始前に血液凝固第VIII因子製剤による定期補充療法を実施している患者については、本剤2回目の投与前日までは出血のリスクを低減するため血液凝固第VIII因子製剤の定期補充を継続することが望ましい。また、本剤投与中の出血に対する血液凝固第VIII因子製剤の自己注射の必要性及び種類・用量等について、医師はあらかじめ患者又はその家族に指導する ③後天性血友病A患者における出血傾向の抑制：凝固能が回復する場合があるため、第VIII因子活性、インヒビター力価等の検査を定期的実施する（用法関連注意②、臨床成績②参照）【特定背景関連注意】①生殖能を有する者：妊娠する可能性のある女性には、投与中及び最終投与後少なくとも6ヵ月間において避妊する必要性及び適切な避妊法について説明する ②妊婦：妊婦又は妊娠している可能性のある女性には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与する。生殖発生毒性試験は実施していない。一般にヒトIgGは胎盤を通過することが知られている ③授乳婦：治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し、授乳の継続又は中止を検討する。本剤のヒト乳汁中への移行性については不明であるが、一般にヒトIgGは母乳に分泌されることが知られている ④小児等：低出生体重児、新生児及び乳児を対象とした有効性及び安全性を指標とした臨床試験は実施していない ⑤高齢者：患者の状態を観察しながら慎重に投与する。一般に生理機能が低下している

【相互作用】併用注意

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤 （警告①②、重要な基本的注意①③、重大な副作用④⑥参照）	血栓塞栓症又は血栓性微小血管症が現れるおそれがある。本剤投与中及び投与中止後6ヵ月間は、活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤又は乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤の投与は避ける。本剤投与中及び投与中止後6ヵ月間の出血に対してやむを得ず活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤又は乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤を投与する場合は必ず血友病に対する十分な治療経験を有する医師のもと、必要な血液凝固系検査等が実施可能で血栓塞栓症及び血栓性微小血管症に対する適切な処置が可能な医療機関で投与する	先天性血液凝固第VIII因子欠乏ヒト血漿を用いたプロトロンビン生成試験（ <i>in vitro</i> ）において、本剤単独時に比べて本剤との併用時に顕著なプロトロンビン生成の促進が認められた。活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤由来の活性型血液凝固第IX因子及び第X因子が本剤による凝固促進に影響を与える可能性が考えられ、凝固活性の増加につながるおそれがある
乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤 （警告①②、重要な基本的注意①③、重大な副作用④⑥参照）	必ず血友病に対する十分な治療経験を有する医師のもと、必要な血液凝固系検査等が実施可能で血栓塞栓症及び血栓性微小血管症に対する適切な処置が可能な医療機関で投与する	乾燥濃縮人血液凝固第X因子加活性化第VII因子製剤に含まれる血液凝固第X因子が本剤による凝固促進に影響を与える可能性が考えられ、凝固活性の増加につながるおそれがある

【副作用】次の副作用が現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には中止するなど適切な処置を行う

①重大な副作用 ③血栓塞栓症（0.7%）：本剤投与中の出血に対して活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤等のバイパス止血製剤を投与する際、又は血栓塞栓症の危険因子を有する後天性血友病A患者に本剤

を投与する際は、血栓塞栓症が現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には本剤及びバイパス止血製剤を中止するなど、適切な処置を行う（警告①②、重要な基本的注意①③、相互作用参照） ④血栓性微小血管症（0.7%）：投与中の出血に対して活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤等のバイパス止血製剤を投与する際は血栓性微小血管症が現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には本剤及びバイパス止血製剤を中止し、適切な処置を行う（警告①②、重要な基本的注意①③、相互作用参照）

②その他の副作用

	5%以上	5%未満
消化器		悪心
皮膚		毛髪成長異常
その他	注射部位反応	頭痛、疲労、血液検査異常（ABO式血液型の凝集素検出能の低下）、血中クレアチンホスホキナーゼ増加

【適用上の注意】①薬剤調製時の注意 ④異なる濃度の本剤を混注しない ⑤他の製剤と本剤を混注しない ⑥製品由来の半透明～白色の微粒子をわずかに含むことがあるので、孔径5µmのフィルターを通した後に投与する ⑦薬剤投与前の注意：室温に戻しておく ⑧薬剤投与時の注意 ①使用後の残液は使用しない ②外観に異常を認めた場合には使用しない ③投与は腹部又は上腕部や大腿部に行う。同一箇所へ繰り返し投与することは避ける ④皮膚が敏感な部位、皮膚に異常のある部位（傷、発疹、発赤、硬結等）には投与しない ⑤薬剤交付時の注意 ①患者が家庭で保存する場合は、薬剤バイアルは外箱に入れた状態で、凍結を避け、冷蔵庫内で保存する。やむを得ず室温（30℃以下）で保存する場合は、7日以内に使用する。7日以内に使用しない場合は、再度冷蔵保存（2～8℃）することも可能だが、室温での保存は累積7日を超えない ②子供による誤用等避けるため、薬剤の保管に十分注意する ③使用済みの医療機器の処理については、主治医の指示に従う 【その他の注意】①臨床使用に基づく情報：先天性血友病A患者を対象とした国際共同第III相臨床試験において、抗エミシズマブ抗体の産生が398例中14例（3.5%）に報告されている。また、先天性血友病A患者を対象とした国内第I/II相臨床試験において、抗エミシズマブ抗体の産生が18例中4例に報告されている。これらのうち、国際共同第III相臨床試験において、中和活性を有すると考えられる抗エミシズマブ抗体の産生が3例に認められ、効果の減弱（APTT延長、出血の発現）を認めた症例も報告されている。後天性血友病A患者を対象とした国内第III相臨床試験において、抗エミシズマブ抗体の産生が14例中2例に報告されている。このうち1例では、抗エミシズマブ抗体に起因すると考えられる血漿中エミシズマブ濃度の低下が認められた ②非臨床試験に基づく情報 ③本剤はマウス及びラットには交差反応性を示さないため、がん原性試験は実施されていない ④先天性血液凝固第VIII因子欠乏ヒト血漿を用いたプロトロンビン生成試験（*in vitro*）において、本剤と活性型血液凝固第VII因子〔エプタコグアルファ（活性型）（遺伝子組換え）〕製剤の併用により、活性型プロトロンビン複合体（乾燥人血液凝固因子抗体迂回活性複合体）製剤との併用時の顕著な作用に比べると弱いものの、プロトロンビン生成の促進が認められた。また、血液凝固第VIII因子製剤との併用においてもプロトロンビン生成の促進が認

められた 【取扱い上の注意】 外箱開封後は遮光して保存する
 【保存等】 2~8°C保存。有効期間：(12mg) 18ヵ月、(12mgを除く) 24ヵ月 【承認条件】 ①医薬品リスク管理計画を策定の上、適切に実施する ②血液凝固第Ⅷ因子に対するインヒビターを保有する先天性血友病A (先天性血液凝固第Ⅷ因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制：日本人での投与経験が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、使用患者の背景情報を把握するとともに、安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じる

【薬物動態】 (#：承認用法・用量は1回3mg/kgを1週間の間隔で4回皮下注し、その1週間後の5回目投与から1回1.5mg/kgを1週間の間隔、1回3mg/kgを2週間の間隔又は1回6mg/kgを4週間の間隔で皮下注、又は、1日目に6mg/kg、2日目に3mg/kgを皮下注し、8日目から1回1.5mg/kgを1週間の間隔で皮下注) ①血中濃度 ②単回投与：日本人の健康成人男性に0.01, 0.1, 0.3又は1mg/kg (各6例) を単回皮下注[#]時の薬物動態パラメータは次表のとおり [平均値 ± 標準偏差, T_{max}のみ中央値 (範囲)]

用量 (mg/kg)	C _{max} (μg/mL)	T _{max} (day)	AUC _{inf} (μg·day/mL)	t _{1/2} (day)
0.01	0.0675 ± 0.0120	14.1 (5.00-28.0)	算出せず	算出せず
0.1	0.655 ± 0.0837	12.0 (7.00-14.1)	30.2 ± 9.28	28.3 ± 4.77
0.3	1.72 ± 0.377	10.1 (7.00-11.1)	86.5 ± 17.9	30.3 ± 4.12
1	5.92 ± 1.24	10.1 (4.00-14.2)	266 ± 50.0	29.0 ± 3.26

③反復投与 ④先天性血友病A (先天性血液凝固第Ⅷ因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制 (日本人及び外国人データ) (1)1週間隔：12歳以上のインヒビター保有先天性血友病A患者112例、12歳未満 (体重40kg未満の12~17歳を含む) のインヒビター保有先天性血友病A患者63例、又は12歳以上のインヒビター非保有先天性血友病A患者99例に3mg/kgの用量で1週間隔で4週間反復皮下注し、その後1.5mg/kgの用量で1週間隔で反復皮下注時、投与開始4週後に血漿中濃度トラフ値が定常状態に到達し、その後50 μg/mL程度又はそれをやや上回る平均値を維持。血漿中濃度トラフ値推移はこれら3つの集団間で同様 (2)2週間隔：12歳以上のインヒビター非保有先天性血友病A患者49例に3mg/kgの用量で1週間隔で4週間反復皮下注し、その後3mg/kgの用量で2週間隔で反復皮下注時、投与開始4週後までの血漿中濃度トラフ値推移は前記(1)と同様で、その後45 μg/mLをやや上回る平均値を維持 (3)4週間隔：12歳以上のインヒビター保有及び非保有先天性血友病A患者41例に3mg/kgの用量で1週間隔で4週間反復皮下注し、その後6mg/kgの用量で4週間隔で反復皮下注時、投与開始4週後までの血漿中濃度トラフ値推移は前記(1)と同様で、その後40 μg/mLをやや上回る平均値を維持 ⑤後天性血友病A患者における出血傾向の抑制：18歳以上の後天性血友病A患者12例に1日目に6mg/kg、2日目に3mg/kgの用量で皮下注し、8日目から1.5mg/kgの用量で1週間隔にて反復皮下注時、投与開始1週後に血漿中濃度トラフ値が定常状態に到達し、その後35 μg/mLをやや上回る平均値を維持 ⑥吸収：日本人の健康成人男性に1mg/kgを腹部、上腕部又

は大腿部 (各12例) に単回皮下注[#]時、血漿中濃度のC_{max}及びAUC_{inf}を基に推定された腹部に対する上腕部及び大腿部の相対的バイオアベイラビリティは、82.3%~116.8%の範囲。なお、腹部、上腕部及び大腿部への皮下注時の絶対的バイオアベイラビリティは、80.4%~93.1%の範囲 ⑦分布：日本人の健康成人男性12例に0.25mg/kgを単回静注時[#]、本剤のV_sの平均値は106mL/kg 【臨床成績】 有効性及び安全性に関する試験 ①先天性血友病A (先天性血液凝固第Ⅷ因子欠乏) 患者における出血傾向の抑制 ②国際共同第Ⅲ相臨床試験 (BH29884試験) ③成人/青年 (12歳以上) のインヒビター保有先天性血友病A患者を対象とし、バイパス止血剤による出血時の止血療法を実施していた患者53例 (日本人6例を含む) を、3mg/kgの用量で週1回4週間反復皮下注後1.5mg/kgの用量で週1回反復皮下注する群 (A群：本剤週1回定期投与群、35例) 又は出血時の止血療法を継続する群 (B群：本剤定期投与非実施群、18例) にランダムに2：1の比で割り付け、割り付けられた最終の患者が24週の観察期間を完了した時点又は試験を中止した時点で両群の年間出血率を比較。主要評価項目である治療を要した出血の年間出血率の成績は次のとおり。〔年間出血率の中央値 (範囲) (回/年)〕 A群：0.0 (0.00,33.72), B群：18.8 (0.00,77.80) 〔年間出血率 [95%信頼区間] (回/年) ※〕 A群：2.9 [1.69,5.02], B群：23.3 [12.33,43.89] 〔群間比 (A群/B群) [95%信頼区間], P値※〕 0.13 [0.057,0.277], < 0.0001。※：投与群、試験登録前24週間の出血回数 (9回未満, 9回以上) を固定効果、評価期間の対数をオフセットとした負の二項回帰モデル ④また、試験登録前にバイパス止血剤の定期輸注を受けていた患者に、A群と同様の用法・用量で本剤を定期的に投与する群 (C群) での患者内比較 (24例 (日本人6例を含む)) では、副次的評価項目とした治療を要した出血の年間出血率 [95%信頼区間] は、投与前のバイパス止血剤定期輸注時 [観察期間の中央値 (範囲) : 32.1週 (8.1~49.3週)] には15.7 [11.08, 22.29] 回/年であったのに対し、その後の定期投与時 [観察期間の中央値 (範囲) : 30.1週 (6.9~45.3週)] には3.3 [1.33, 8.08] 回/年であった (初回承認時) ⑤本試験で本剤を投与された全患者での副作用発現頻度は29.5% (33/112例)。主な副作用は、注射部位反応15.2% (17/112例) であった (承認事項一部変更承認時) (効能関連注意参照) ⑥国際共同第Ⅲ相臨床試験 (BH29992試験) ⑦小児 (12歳未満) のインヒビター保有先天性血友病A患者60例 [2歳以下の10例 (1歳が5例, 2歳が5例) を含む] (日本人8例を含む) に3mg/kgの用量で週1回4週間反復皮下注し、その後1.5mg/kgの用量で週1回反復皮下注。その内、12週間以上投与された59例 (日本人8例を含む) の観察期間の中央値 (範囲) は29.6週 (18.4~63.0週) で、同59例での治療を要した出血の年間出血率 [95%信頼区間] は0.3 [0.13, 0.52] 回/年 ⑧本試験で本剤を投与された全患者での副作用発現頻度は19.0% (12/63例)。主な副作用は、注射部位反応17.5% (11/63例) (承認事項一部変更承認時) (効能関連注意参照) ⑨国際共同第Ⅲ相臨床試験 (BH30071試験) ⑩成人/青年 (12歳以上) のインヒビター非保有重症先天性血友病A患者を対象とし、血液凝固第Ⅷ因子製剤による出血時の止血療法を実施していた患者89例 (日本人10例を含む) を対象に、3mg/kgの用量で週1回4週間反復皮下注後1.5mg/kgの用量で週1回反復皮下注する群 (A群：本剤週1回定期投与群)、3mg/kgの用量で週1回4週間反復皮下注後3mg/kgの

用量で2週に1回反復皮下注する群（B群：本剤2週に1回定期投与群）又は出血時の止血療法を継続する群（C群：本剤定期投与群）にランダムに2：2：1の比で割り付け、割り付けられた最終の患者が24週の観察期間を完了した時点又は試験を中止した時点でA群及びB群とC群の年間出血率を比較。主要評価項目である治療を要した年間出血率の成績は次表のとおり

	A群 (36例)	B群 (35例)	C群 (18例)
年間出血率の中央値 (範囲) (回/年)	0.0 (0.0, 10.8)	0.0 (0.0, 26.8)	40.4 (4.3, 98.7)
年間出血率 [95% 信頼区間] (回/年) ※	1.5 [0.9, 2.5]	1.3 [0.8, 2.3]	38.2 [22.9, 63.8]
群間比 (A群/C群 又はB群/C群) [95%信頼区間], P値※	0.04 [0.020, 0.075] <0.0001	0.03 [0.017, 0.066] <0.0001	

※：投与群，試験登録前24週間の出血回数（9回未満，9回以上）を固定効果，評価期間の対数をオフセットとした負の二項回帰モデル

①試験登録前に血液凝固第Ⅷ因子製剤の定期補充を受けていた患者に，A群と同様の用法・用量で定期的に投与する群（D群）での患者内比較〔48例（日本人9例を含む）〕では，副次的評価項目とした治療を要した出血の年間出血率〔95%信頼区間〕は，本剤投与前の血液凝固第Ⅷ因子製剤の定期補充時〔観察期間の中央値（範囲）：30.1週（5.0～45.1週）〕には4.8〔3.22, 7.09〕回/年であったのに対し，その後の本剤の定期投与時〔観察期間の中央値（範囲）：33.7週（20.1～48.6週）〕には1.5〔0.98, 2.33〕回/年 ②本試験で本剤を投与された全患者での副作用発現頻度は30.7%（46/150例）。主な副作用は，注射部位反応25.3%（38/150例）（承認事項一部変更承認時）（効能関連注意参照） ③国際共同第Ⅲ相臨床試験（BO39182試験） ④成人/青年（12歳以上）のインヒビター保有及び非保有先天性血友病A患者41例（日本人6例を含む）に3mg/kgの用量で週1回4週間反復皮下注し，その後6mg/kgの用量で4週に1回反復皮下注。観察期間の中央値（範囲）は25.6週（24.1～29.4週）で，治療を要した出血の年間出血率〔95%信頼区間〕は2.4〔1.38, 4.28〕回/年 ⑤本試験で本剤を投与された全患者での副作用発現頻度は27.1%（13/48例）。主な副作用は，注射部位反応20.8%（10/48例）（承認事項一部変更承認時）（効能関連注意参照） ⑥後天性血友病A患者における出血傾向の抑制 国内第Ⅲ相臨床試験（JO42003試験）：成人（18歳以上）の後天性血友病A患者を対象とし，治験登録時点で免疫抑制療法を直ちに開始予定又は実施中の患者12例を対象に，本剤を1日目に6mg/kg，2日目に3mg/kgの用量で皮下注し，8日目から1.5mg/kgの用量で週1回反復皮下注。第Ⅷ因子活性が50 I.U./dL超であることが確認され，かつ直近の治療を要した出血に対する最後の血液凝固因子製剤投与から72時間超が経過していた場合に本剤を終了（投与終了基準） ⑦本剤投与開始から投与終了基準を満たすまで（又はデータカットオフ日のいずれか早い方）の評価期間〔中央値（範囲）：44.5日（8～208日）〕では，12例中2例（16.7%）で治療を要した出血が発現し，治療を要した大出血は発現しなかった。診断日又は初回出血日のいずれか早い方（最大本剤投与開始から24週間前）から本剤投与開始日までの評価期間〔中央値（範囲）：68.0日（17～168日）〕では，12

例中6例（50.0%）で治療を要した出血が発現し，その6例全例で治療を要した大出血が発現した。治療を要した出血の年間出血率において，本剤投与開始前と比較して本剤投与開始後で減少或いは0を維持したのは，12例中11例（91.7%） ⑧本試験で本剤を投与された全患者での副作用発現頻度は25%（3/12例）。その内訳は，深部静脈血栓症，プロトロンビンフラグメント1・2増加，血小板減少症が各1例（8.3%）（用法関連注意②，重要な基本的注意③参照） 【薬効薬理】 ①作用機序：活性型血液凝固第Ⅸ因子及び血液凝固第Ⅹ因子に結合するヒト化二重特異性モノクローナル抗体であり，血液凝固第Ⅷ因子の機能代替作用を有する ②*in vitro*抗原結合及び活性型血液凝固第Ⅸ因子による血液凝固第Ⅹ因子活性化の促進作用：本剤は，プラズモン共鳴法による*in vitro*蛋白質結合測定系において活性型血液凝固第Ⅸ因子及び血液凝固第Ⅹ因子に結合し，合成発色基質法による*in vitro*酵素反応測定系において活性型血液凝固第Ⅸ因子による血液凝固第Ⅹ因子の活性化を促進 ③*in vitro*血液凝固反応促進作用：本剤は，インヒビター含有血液凝固第Ⅷ因子欠乏血漿及びインヒビター非含有血液凝固第Ⅷ因子欠乏血漿のいずれにおいても，*in vitro*添加によりAPTTの短縮及びプロンビン生成の増加を示し，血液凝固反応を促進。また後天性血友病A患者血漿においても，*in vitro*添加によりインヒビターのエピソードの違いによらずプロンビン生成の増加を示した ④*in vivo*出血傾向抑制作用及び止血作用：抗血液凝固第Ⅷ因子抗体を投与することにより血友病Aを誘発させたサルで，本剤投与による出血傾向抑制作用及び止血作用が認められた

【性状】 エミシズマブ（遺伝子組換え）は，448個のアミノ酸残基からなる抗活性型血液凝固第Ⅸ因子のH鎖1本，444個のアミノ酸残基からなる抗血液凝固第Ⅹ因子のH鎖1本及び214個のアミノ酸残基からなるL鎖2本で構成される糖蛋白質（分子量：148,000）

【備考】 再審査期間中（血液凝固第Ⅷ因子に対するインヒビターを保有する先天性血液凝固第Ⅷ因子欠乏患者における出血傾向の抑制，血液凝固第Ⅷ因子に対するインヒビターを保有しない先天性血液凝固第Ⅷ因子欠乏患者における出血傾向の抑制について2028年3月22日まで。後天性血友病A患者における出血傾向の抑制について2022年6月20日から10年）

【保険通知】 平成30年5月21日保医発0521第8号（令和4年6月20日保医発0620第2号により改正済）薬価基準の一部改正に伴う留意事項について ヘムライブラ皮下注30mg，同皮下注60mg，同皮下注90mg，同皮下注105mg及び同皮下注150mg

①本製剤は，エミシズマブ製剤であり，本製剤の自己注射を行っている患者に対して指導管理を行った場合は，「診療報酬の算定方法」（平成20年厚生労働省告示第59号）別表第一医科診療報酬点数表（以下「医科点数表」という。）区分番号「C101」在宅自己注射指導管理料を算定できるものであること ②本製剤は針及び注入器付の製品であるため，医科点数表区分番号「C101」在宅自己注射指導管理料を算定する場合，医科点数表区分番号「C151」注入器加算及び「C153」注入器用注射針加算は算定できないものであること ③本製剤を「後天性血友病A患者における出血傾向の抑制」に用いる場合は，用法及び用量に関連する注意において，「凝固能に関する検査結果及び患者の状態を考慮して，適切な時期に投与を終了すること。」とされているので，使用に当たっては十分留意すること